

第1回 「武田信玄」

学芸員 海老沼真治

1. 古文書に「親しむ」ための一例

初めて古文書を読もうという方は、まずどうやって勉強すれば良いか、ということが高いハードルになるかもしれません。古文書は「ミミズが這ったような字」と言われるように、現在一般的に用いる文字と同じとは思えないほどに崩された文字で書かれている場合が多く、専門的な学習をしなければ読むことができないからです。

現在では初心者向けの古文書解読の入門書も数多く出版されています。ただし、これを勉強すれば誰でも必ず古文書が読める！という勉強方法が存在するわけではありません。

まずは皆さんに適した学習方法を見つけていただくこととなりますが、参考として私が学生時代に勉強していたことをいくつかあげてみましょう。

【①（まず）“活字”を読んでみる】

いきなり実際の古文書を読む前に、古文書に書いてあることを現代の活字にしたもの（翻刻文）を読んでみます。

これは、まず古文書の正しい読み方（当時の言葉使いや言い回し、文書の書き方）を身につけることを目的としています。

活字を読むことに慣れていくと、実際の古文書で文字の形がわからないものがあったとしても、書式や前後の文脈から内容を想定することができるようになります。

武田氏関係の古文書であれば、『山梨県史』資料編、『戦国遺文武田氏編』に、古文書の翻刻文が多数収録されています。

自治体史によっては、一部に翻刻だけでなく「読み下し文」も付けてあるものがあります（県内では『甲府市史』『富士吉田市史』の古代中世資料編など）。また、岩波書店『日本史史料』、吉川弘文館『史料による日本の歩み』なども、古文書の翻刻文に加え、読み下し文や解説が付いているものもあり（全てではない）、読み方を学ぶのに便利です。

まずは、皆さんの興味のある時代や地域の古文書について、活字化された史料集を読んでみることをお勧めします。

最近では、インターネット上で古文書の学習ができるサイトも公開されています。中世の古文書ですと、「日本の中世文書 Web」(<https://chuseimonjo.net>)は、文書の読み方を音声で示してくれるなど、とても親切です。

この時、わからない言葉があれば、面倒でも国語辞典などで意味を調べてみましょう。古文書に出てくる言葉は、例えば「自然」など、字は同じでも現代とは異なる意味で使われる言葉もあります。

※古文書に出てくる言葉を調べるには、古語を豊富に収録した辞典を使用します。1冊ものとしては『広辞苑』(岩波書店)となりますが、ぜひ一度は図書館等で『日本国語大辞典』(新版全13冊、小学館)を使ってみてください。

古文書の訓読には、多少の漢文・古文の知識が必要となります。漢文なら、多くの場合は、レ点、一二点、上下点くらいがわかっていれば問題ありません。

では、早速「活字を読む」ことに挑戦してみましょう。今回のテーマ「武田信玄」に即して、武田氏の古文書を読みたいと思います。

【課題1】

次ページの活字の翻刻文を読んで、本文(日付署名より前の文)の読み下し文を書いてみましょう。

※一部、難しい言葉が含まれています。わからなければ無理せず、飛ばして先を読み進めてください。

【課題1】 武田信玄書状 翻刻文

於于其地長々苦勞察入候、甲信ノ
諸卒一統之在陣候則、不限一身
勞煩二候得共、番普請等之窮屈
可為大儀候条、為番替近日下
伊奈衆指遣候、着城之上、即其方
參陳待入候、恐々謹言

八月廿日 信玄（花押）

（異筆）「原与左衛門尉殿」

（読み下し文を書いてみましょう）

※翻刻文の改行は気にせず、
そのまま書き続けてください。

いかがでしたでしょうか？

全体のうち、漢文のように返って読んでいるのは、「於于（くにおいて）」（1行目）。「不限（くにかぎらず）」（2行目）、「可為（くたるべく）」「為（くとして）」（4行目）くらいで、あとは現代文と同様に、上から下に読んでいくものです。

古文書というとなかなか難しい読み方、難しい言葉ばかりが並んでいると思いますが、現代の読み方に近い部分も少なからずあります。初めは読めるところだけでも構いませんので、少しずつ当時の読み方や言葉遣いに慣れていくことが大事です。近道はありませんので、ゆつくりと学習していきましょう。

最後に、文中に出てきた難しい言葉を説明します。

「則（ときんば）」（2行目）…この時には

※専門家でもわからないレベルの難語ですので、ここで憶える必要はありません。

「番普請（ばんふしん）」（3行目）…交代で城郭等の土木工事に従事すること。

武田氏の家臣はこの役を課されることがありました。

「窮屈（きゅうくつ）」（3行目）…①心身の自由を束縛されること。思う

ように身動きできなかったり、気づまりに感じたりすること。②疲れること。疲労。③貧しくて思うようにならないこと。

…現在では①の意味で用いられることがほとんどですが、この文書では②の意味で用いられていることがわかります。

このように、現在使われる言葉であっても、現在とは違う意味で用いられる場合がありますので、はじめのうちは煩をいとわず国語辞典などで調べてみましょう。

【回答例】

その地において長々の苦勞察し入り候。
甲信の諸卒一統の在陣に候ときんば、一身の勞煩に限らず候えども、番普請等の窮屈大儀たるべく候条、番替として近日下伊奈衆を指し遣し候。着城の上、すなわちその方の参陳（陣）待ち入り候。恐々謹言。

【意識例】

（あなたの）そちらでの長期にわたる苦勞を察します。しかしながら、現在甲斐・信濃の将兵はすべて陣中におりますので、あなた一人が苦勞しているわけではありませんが、番普請などの任務で大変疲れていることと思いますので、交代要員として（信濃）下伊那衆を派遣しました。（下伊那衆が）到着したら、すぐにあなたが（信玄のもとに）参陣することを待っています。

※（課題１）の古文書「武田信玄書状」 山梨県立博物館蔵

（歴―2006-000-000005）

於此處長有昔入中候
福乘一統之陣則不限り
昔が心成者善後おる新本
一力大候之衆の善後を
伊奈府指巻に書候と云ふ方
余陳伯入りて計

信玄

原とる筆の所見

【② “活字” と古文書を見比べてみる】

次に、古文書の写真と活字になった翻刻文を見比べて、文字がどのように崩されているかを確認してみましょう。

この時、「くずし字辞典」などを使って確認してみるのもよいでしょう。

※「くずし字辞典」の多くは、少なくともへんやつくりなど、ある程度字がわかっているか使用することができます。ですので、最初は写真と活字で「答えがわかる」文字を調べてみましょう。

古文書と活字、解説がセットで読める入門的な図書を読んでみるのも良いでしょう。

武田氏とほぼ同時代のもので、価格も手頃で入手しやすいものとしては、

- ・小和田哲男『戦国武将の手紙を読む』（中公新書、二〇一〇年十一月）
 - ・丸島和洋『真田信繁の書状を読む』（星海社新書、二〇一六年九月）
- などがあります。

また『山梨県史』資料編4・5は、別冊で一部の古文書の写真が掲載されていますので、翻刻文と見比べて読むことができます。

では、いよいよ古文書原本の写真を見て、どんな文字が書いてあるかを判読してみましょう。

ただし、古文書によって文字の崩し方も様々ですので、初めのうちは読みやすいもの（一見してわかりそうな文字がいくつかあるもの）を選んで読み進めていくと良いでしょう。

【課題2-1】

次ページにある古文書の写真を読み、まずはどんな文字が書いてあるか、翻刻文を作ってみましょう。

※次々ページに本文最初の2行までの翻刻文を示しておきましたので、3〜5行目の解読に挑戦してみてください。

わからない文字はあまり長考せず、まずは読める文字を埋めていきましよう。そうすると、前後の文脈でわからない文字が想定できることもあります。

※読点「、」は付けなくても構いません。

宣

其知刻本百姓雖地不

能細心前(一)訪良也

若苗地頭今難保二

有言と子細何乃理一

か下知者也何件

元龜二年



原

依

明治系譜河内氏

【課題2-1】武田家朱印状 翻刻文

定

① 其知行本百姓雖他所

② 徘徊候、如前々可被召返候、

③

④

⑤

元龜二年辛未 原隼人佑奉之

三月六日（龍朱印）

朝比奈駿河守殿

【回答例】

定

- ① 其知行本百姓雖他所
- ② 徘徊候、如前々可被召返候、
- ③ 若当地頭令難渋者、可
- ④ 有言上子細、任道理可被
- ⑤ 加御下知者也、仍如件

元龜二年辛未 原隼人佑奉之
三月六日（龍朱印）

朝比奈駿河守殿

いかがでしたでしょうか？

初めての方でも、③行目なら「地頭」、④行目なら「言上」、⑤行目なら「下知」「也」あたりは読めたかもしれません。

また、すでに翻刻文を示した①②行目の中には、③④⑤行目にも同じ字（部首を含む）が使われていることに気づきましたでしょうか？

たとえば、

- ①行目「知」↓⑤行目
- ①行目「他」↓③行目「地」、⑤行目「也」
- ②行目「可」↓③④行目 などがあります。

このように、既に読んだ字が繰り返し使われる場合もありますので、わからない文字が出てきたら、前に読んだところに同じ字がないか、探してみるのもひとつの解読方法です。

また、同じ字でも、異なるくずし方で書かれる場合もあります。
たとえば、

- ①行目「雖」↓③行目「難」
- ②行目「如」↓⑤行目
- ③行目「者」↓⑤行目 などがあります。

これらを押さえておけば、一つの文字に対する様々なくずし方を学ぶこともつながります。

※なお、⑤行目の「加」と「御」の間隔が、他より少し空いています。これは、信玄の命令を示す「御下知」という言葉を敬って間隔をとったものです。この作法のことを「**闕字**」^{けつじ}といい、中近世の古文書によく用いられる作法です。

では、こちらも読み下しに挑戦してみましょう。

【課題2-2】

【課題2-1】で読んだ翻刻文を、【課題1】のように読み下し文にしてみましよう。

【課題2-2】読み下し文を書いてみましょう。

※翻刻文の改行は気にせず、そのまま書き続けてください。

定（さだめ）

元亀二年_{辛未} 原隼人佑これを奉る

三月六日（龍朱印）

朝比奈駿河守殿

【回答例】

その知行の本百姓、他所へ徘徊し候といえども、前々のごとく召し返されべく候。もし当地頭難渋せしむれば、子細を言上あるべし。道理に任せて御下知を加えられべきものなり。よって件のごとし。

【意識例】

（あなたの）領地の（中に住んでいる）本百姓が、（居住地を離れて）他所へ歩き回っていても、以前のとおりに（元の居住地に）呼び戻すこと。もし、（徘徊先の）領主が（百姓を呼び戻すことに）難色を示した場合は、その経緯を詳しく報告すること。道理に従って（信玄様のご命令を下します）。

この古文書では、それほど難解な言葉は出てきませんでしたが、現在とは異なる読み方をする字がありました。

「若（もし／もしくは）」（③行目）…「わかい」と読むこともありますが、

「万」といった意味で使われることも多いです。

「者」…③行目の「者」は、かな「は」で読んでいますが、⑤行目の「者」は漢字「もの」として用いられています。

また、この古文書に書かれている字は、くずし字の「お手本」のような字が多く含まれています。

①行目の「本」「所」

②行目の「被」

③行目の「当」

④行目の「有」「道」

あたりは、くずし字辞典の用例にも同じような字形が出ています。よく使われる字でもありますので、ぜひ憶えておきましょう。

【③ “かな” 文字をおぼえる】

くずし字学習のもう一つの方法として、「かな」の崩し字をおぼえることも重要です。「かな」は漢字が崩れてできた字ですので、例えば「あ」なら、元となった「安」という漢字の崩し方をおぼえることにもつながります。

また、当時は「かな」に一つの漢字だけでなく、複数の漢字が使われていました。

「は」であれば、現在は「波」をもとにした字だけですが、「者」「盤」「葉」などの字も用いられました。つまり、ひとつの「かな」を学ぶことで、複数の漢字の崩し方をおぼえることができます。

【回答例】

- ①馬と、きんこく近国まで申ならハす名馬なれば、めいば鬼鹿をにか
- ②毛けと名付、ちやくしかつちよ嫡子勝千代殿、しよもう所望なされ候所に、信虎
- ③公、事あく以外の悪大将にてましますせば、子息しそくとて

「と」「な」「ま」「せ」などは、今のかなと同じ字が使われています。
一方で、①行目「す」は「須」、「れ」は「連」が使われており、それぞれ現在の「す」寸「れ」礼」とは異なる字になっています。
ただし、次の行には「れ」礼」が使われているのがわかりましたでしょうか？

以上、3通りの学習方法を紹介しましたが、どれをやるか、どの順でやるかは、皆さんのやりやすいものを選んで取り組んでみてください。

今回は以上です。お疲れさまでした。